カスティーリャ・レオン王賢王アルフォンソ一〇世小伝

中川和彦

一

アルフォンソ一〇世は、一三世紀のカスティーリャ・レオン王国の国王で、一般ではその法典編纂事業が知られている。その時代、イベリア半島では、イスラーム勢力に対するレコンキスタ（国土回復）の戦が進められており、アルフォンソ一〇世も、この戦に王として参加している。

筆者は、ラテンアメリカ法の基盤をなすカスティーリャ法の歴史の勉強の過程で[1]、アルフォンソ一〇世の数々の立法に出会い、王の生涯に関心をもった。と言うのは、筆者は法律を研究するにあたり、法律だけをみるのではなく、法律を作り、解釈し、運用し、また、適用を受けるのは人（ヒト）であり、人（ヒト）を通じて法律を観察すべきである、と思っているからである。

戦いに明け暮れしたアルフォンソ一〇世が賢王と呼ばれているのは、法典編纂事業は無論、その他にも、文学、

詩歌、歴史、天文学等の学術研究の推進者であったからで、それと比べると、統治者としては、むしろ、失政が多く、晩年、権威を失墜し、失意のまま亡くなっており、賢王と言うにはほど遠い感じがしないわけではない。

筆者は、アルフォンソ一〇世が編纂したいくつかの法典を検討しながら、その生涯を、結果として、たどっている。手もとにある文献は少なく、筆者の研究も不十分である。しかし、与えられたこの機会に、アルフォンソ一〇世の生涯をクロノロジカルに素描することとする。(2)

(1) 中川和彦「カスティーリャの興隆とその法――ラテンアメリカ法講義覚え書――(一)」(未完)『成城法学』五二号(平成九年一月)一ページ以下。

(2) アルフォンソ一〇世の伝記で手もとにあるのは左記である。

Antonio Ballesteros Beretta, *Alfonso X El Sabio*, Con índices de Miguel Rodríguez Llopis, 1984, Barcelona (Ediciones «El Albir», S. A.).

Manuel González Jimenez, *Alfonso X El Sabio 1252~1284*, 1993, Palencia (Diputación Provincial de Palencia /Editorial La Olmeda, S. L.).

Alfonso X El Sabio, Vida, obra y época I, Presentación de Manuel González Jimenez, 1989, Madrid (Sociedad Española de Estudios Medievales).

Joseph F. O'Callaghan, *The Learned King. The Reign of Alfonso X of Castile*, 1993, Philadelphia (University of Philadelphia Press).

アルフォンソ一〇世の文章のアンソロジーは左記である。

Alfonso El Sabio, *Antología*, Con un estudio preliminar de Margarita Peña y un vocabulario ("Sepan Cuan-

os…" Núm, 229), 1973, México (Editorial Porrúa, S. A.).

アルフォンソ一〇世の時代のイベリア半島の状況については、左記を参照されたい。

Historia de España Menéndez Pidal, Tomo XIII : La Expansión Peninsular y Mediterránea (c. 1212–c. 1350), Vol. 1 La Corona Castilla, 1990, Madrid (Espasa–Calpe, S. A.).

J. N. Hillgarth, *The Spanish Kingdoms 1250~1516, Volume I : 1250~1410 Precarious Balance,* 1976, Oxford (Clarendon Press).

大内一稿「帝国の基盤カスティーリャ王国の苦悩」『もうひとつのスペイン史』（同朋舎出版　一九九四年）一ページ以下。

アルフォンソ一〇世の文学・学術上の研究の成果について、左記を参照されたい。

Evelyn S. Proctor, *Alfonso X of Castil. Patron of literature and learning,* 1961 (Rep. in 1980 by Greenwood Press).

Robert I. Burns (ed.), *Emperor of Culture. Alfonso X the Learned of Castile and his Thirteenth–Century Renaissance,* 1990, Philadelphia (University of Pennsylvania Press).

二

一　一二二一年一一月二三日、賢王アルフォンソ一〇世（Alfonso X）[1]は、父フェルナンド三世（Fernando III）、母王妃ベアトリス（Beatriz）の長子としてトレド（Toledo）で生まれた。[2]

フェルナンド三世（一二〇一年生、一二五二年没）はカスティーリャ・レオン国王で、その父はレオン国王ア

ルフォンソ九世、母はカスティーリャ王家出身の王妃ベレングエラ（Berenguela）である。フェルナンド三世は、両親の離婚後、父王のもとで養育されていたが、カスティーリャ王エンリーケ一世が一四歳で急死、王位を継承する立場にあった王の長姉のベレングエラは、弟王の喪を秘して、レオンから息子のフェルナンドを呼びよせる。こうして、フェルナンド三世は、一五歳でカスティーリャの王位に就く。その後、一二三〇年にレオン王アルフォンソ九世が逝去し、その王位の継承権を二人の王女（ベレングエラとの婚姻前の王妃テレサとの息女）がもっていたが、二人とも辞退し、弟のフェルナンドがレオンの王位も兼ねることになり、カスティーリャとレオンの両王国が「統合」される。[3]

二　フェルナンド三世の妃ベアトリスは、ドイツのスワビア（Swabia）家の出身で、父フィリップ公は赤髭王フリードリッヒ一世の息子で、母イレーネ（Irene）は東ローマ帝国の皇帝イサーク二世アンゲルス（Isaac II Angelus）の妹にあたり、アルフォンソ一〇世は母の家系からドイツ皇帝とビザンチン皇帝の血統を受け継いでいた。[4]

ベアトリス姫との婚姻の話を進めたのは、ベラングエラの妹で、フランスのルイ八世の王妃ブランカであったと言われる。

ともあれ、一二一九年一一月末、ベアトリス姫はブルゴス（Burgos）に到着。居合わせたトレド（Toledo）の大司教の、姫の容姿の端麗さ、慎み深さを絶賛した記述が残されている。そして、一一月三〇日に婚儀が挙行された。[5]

当時の慣習のためであろうか、顔をお互に見ぬままに結婚した二人であったが、一二三五年妃が逝去するまで

の、一五年余の夫婦生活の間に、一〇人の子宝に恵まれている。夭折した女児二人を除き、次の八人の名が残されている。誕生順に記せば、アルフォンソ、ファドリッケ（Fadrique）、フェルナンド、エンリーケ（Enrique）、フェリッペ（Felipe）、サンチョ（Sancho）、マヌエル（Manuel）（以上、男子）そして、ベレングエラ（祖母と同名）で、ベレングエラ姫は嫁せず、ブルゴスの女子修道院の院長となっている。[6]

三　当時、高貴な家では子供の養育を信頼できる人に託する習慣であった。アルフォンソ一〇世は、その習慣に従って、ガルシア・フェルナンデス（García Fernández）に託される。[6] ガルシア・フェルナンデスは祖母ベレングエラの宮宰（mayordomo）で、その所領のあったガリシア地方でアルフォンソ一〇世は多くの月日を過す。そのためもあってか、アルフォンソ一〇世はガリシア地方の言語に親しむ。[7] また、ガルシア・フェルナンデスの息ファン（Juan）と年頃も近く、一緒に育ち、ファンは信頼できる家臣となる。[8]

このように、父母の膝下から引き離されて幼年期を過ごした結果、その孤独感のようなものがアルフォンソ一〇世の人格形成に影響したのではないか。アルフォンソ一〇世の優柔不断さ、心もとなさ、また、近親者に対する疎遠感にそれが現われているのではないか、との指摘もある。[9]

アルフォンソ一〇世は、将来いつか、王になる人として、注意深く教育されたが、小児時代は普通の子供であった。ただ、読み書きの手ほどきをした教師の名が伝えられていないが、この師の影響の下で、アルフォンソ一〇世は書物、学問を愛好するようになる。

小児時代の公的な行事として、生誕後数カ月の、一二二二年三月三一日、ブルゴスで、アルフォンソ一〇世は王位継承者と宣言され、カスティーリャの貴族、聖職者、および市参事会（consejo）の忠誠宣誓を受けている。[10]

四　一二三一年、アルフォンソ一〇世は初めて出陣する。一〇歳。約一〇〇年前、アルフォンソ六世の息サンチョが、同じく、一〇歳で、出陣して、戦死しているが（一一〇八年）、先例にならったというものの、アルフォンソ一〇世にとり危険な体験であった。

戦場で、兵士たちが「サンティアーゴ」あるいは「カスティーリャ」と叫びながら敵軍に突撃するのを、第一線で、アルフォンソ一〇世は観戦する。また、イスラーム兵の捕虜五〇〇名を斬首する場面も目撃するというか、させられている。[11] このような体験も武将になるために必要であったのであろうか。

五　一二三五年、母王妃ベアトリスが逝去する。母との死別をもって、アルフォンソ一〇世の小児期が終り、青年期に入る。

アルフォンソ一〇世が法学者ハコボ（Jacobo）師に巡り合ったのもその頃である。ハコボ師は、後に、『法の精華』（Flores de las Leyes）を著わしているが、師はこの書物をアルフォンソ一〇世に献じている。

一二四〇年頃、フェルナンド三世は、そろそろ二〇歳になるアルフォンソ一〇世の居宅を調える。さらに、所領も与えられ、その収入で経済的にも自立し、アルフォンソ一〇世のまわりに一つの宮廷ができ上る。貴族の有力者ゴンサーレス＝デ＝ララ（Nuño de González de Lara）も出入りする。[12]

六　アルフォンソ王子の年齢が進むにつれて、フェルナンド三世は王子を政務にかかわらせ始める。一二四二年にアルフェレス・レアル（Alférez Real）に任命されている。[13]

一二四三年、ムルシア（Murcia）王国併合の任務をアルフォンソ一〇世は命じられる。王子の年齢からすると大役であった。その頃、ムルシアを支配していたイスラーム教徒のアベン・ウディエル（Abén Hudiel）は、そ

の立場が弱体化したため、カスティーリャの朝貢国となる道を選んだのである。一二四三年四月、病中のフェルナンド三世に代って、アルフォンソ一〇世は、条約に調印する。[14]

このムルシア王国の併合により、カスティーリャの立場は有利になり、一二四六年、ハエン（Jaén）も朝貢国となり、一二四八年一一月、セビーリャを攻略する。[15]

七　こうして国土が次々に回復されていく一方で、青年となったアルフォンソ一〇世の結婚の話が進められる。国際的な戦略上の理由からであろう、結婚の相手に選ばれたのはアラゴン国王ハイメ一世（Jaime I）の息女ビオランテ（Violante）姫である。二人は一二四三年に婚約する。しかし、姫は幼く、まだ七歳。婚儀までに数年をまたなければならなかった。[16]

婚儀がバリャドリード（Valladolid）で挙行されたのは一二四九年一月二九日で、アルフォンソ一〇世は二七歳、ビオランテ姫は一二歳。[17] 二人の間に一一人の子宝に恵まれている。誕生順に記せば、一二五三年にベレングエラ姫、五四年にベアトリス姫（後述の庶出の姉と同名）、五五年にフェルナンド王子、五六年にレオノール（Leonor）姫、五八年にサンチョ（Sancho）王子、五九年にコンスタンサ（Constanza）姫、六一年にペドロ（Pedro）王子、六四年にファン（Juan）王子、六五年にイサベル姫（Isabel）、六六年にビオランテ姫、そして六七年にハイメ（Jaime）王子である。[18]

ビオランテ姫は頑固とも言える位、意志の強い女性であった。政治上の問題で夫を助け、重大な局面で代理の役割りを果している。[19] もっとも、外交能力にすぐれていたとは言えないし、利己主義的な面もあった、という厳しい見方もされている。[20]

他方、アルフォンソ一〇世は、妻に対して決して忠実な夫ではなかった。当時としては当たり前のこととは云え、愛人（側妾）が何人かいた。その一人が貴族グイリェン＝ペレス＝デ＝グスマン（Guillen Pérez de Guzmán）の息女マヨール（Mayor）で、ビオランテ姫との結婚前に、一二二四年にベアトリス姫を儲けている。ベアトリス姫は、庶出であっても、アルフォンソ一〇世にとり最初の子であり、溺愛する。姫は、後に、ポルトガル王に嫁いでいる。他の愛人との間にも幾人かの子供がいたようで、その一人、アルフォンソ・フェルナンデス（Alfonso Fernández el Niño）は有能で、政治面、軍事面で父アルフォンソ一〇世を助けたと言われる。[21]

八　ところで、アルフォンソ一〇世とビオランテ妃との離婚が計られたという妙な（？）話が伝えられている。結婚した時、妃は一二歳。その故もあって、仲々、子宝に恵まれない。嫡出子の誕生を期待するアルフォンソは業を煮やす。そういう時、カスティーリャとの友好関係を模索していたノルウェーの国王ハーコンが金髪の息女クリスティーナを訪れさせる。しかし、旅に手間どり、カスティーリャに到着したとき、ビオランテ妃は懐妊しており、離婚の話は沙汰止みになり、クリスティーナ姫は、アルフォンソ一〇世の僧籍離脱をした弟フェリッペ王子と結婚した、という。[22] この、かなり流布している話を否定する説も少なくない。[23] しかし、否定説は、クリスティーナ姫のカスティーリャへの旅、フェリッペ王子との結婚は肯定し、否定ないし疑問視するのはアルフォンソ一〇世との結婚話しであり、姫はカスティーリャとの友好の絆として、王子の一人との結婚を目的として、派遣（？）されたのだという。

九　王子時代のアルフォンソ一〇世の今一つの事績はポルトガルのサンショ二世（Sancho II）のための出兵である。

カスティーリャ・レオンの隣国ポルトガルも国土回復の戦いを進め、南進しつつあったが、国王サンショ二世（在位一二二三年～一二四八年）は王権の強化をはかり、ポルトガルの司教、貴族と対立する。司教たちの要請を受けて、一二四五年、ローマ教皇イノケンチウス四世はサンショ二世を廃し、弟のブローニュ（Boulogne）伯アフォンソ（Afonso）に統治権を与えた。ローマ教皇のこのような措置の根拠は、ポルトガルがかつてレオン王国の領土の一部であったが、一二世紀に、ローマ教皇の封臣となる形で独立が認められた、という事情である。[24]

ほとんどすべての貴族から見離されて、サンショ二世はカスティーリャ・レオンのアルフォンソ一〇世（王子）に救援を要請する。王フェルナンド三世は、サンショとアフォンソの対立に中立の姿勢をとる。止むを得ず、アルフォンソ一〇世は、義父となるアラゴンのハイメ一世に騎士三〇〇人の支援を要請し、一二月、ポルトガルに進攻する。そして、翌一二四七年、サンショ二世王を伴って、カスティーリャに帰還する。その頃、フェルナンド三世はアンダルシア攻略にかかっており、七月に始まるセビーリャ攻撃への参加を求められたからである。

一二四八年一月、サンショ二世はトレドで没し、このポルトガルの王位の紛争は一応結着する。[25]

サンショ二世をアフォンソ三世（在位一二四八年～一二七九年）が後継するが、セビーリャを攻略したカスティーリャ・レオン軍が西進することを懸念して、南部の国土回復を急ぐ。しかし、ポルトガルが征圧したアルガルヴェの地域がスペインとの係争の種となる。

（1）フェルナンド三世については、左記を参照されたい。

Gonzalo Martínez Díez, *Fernando III 1217–1252*, 1993, Palencia (Diputación Provincial de Palencia/Editorial La Olmeda, S. L.); Ballesteros, *op. cit.*, p. 9 *et seq.*

(2) González, *op. cit.*, p. 11.

(3) 中川和彦稿、前掲稿、六ページ。

(4) González, *op. cit.*, p. 12.

(5) *ibid.*

(6) *ibid.*, p. 13.

(7) アルフォンソ一〇世の作と言われる詩歌 Cantigas はガリシア地方の言語である。

(8) González, *op. cit.*, p. 13.

(9) Peña, un estudio, en 〔Alfonso El Sabio, *Antologia*〕, p. ix

(10) González, *op. cit.*, p. 14 *et seq.*

(11) *ibid.*, p. 15 *et seq.*

(12) *ibid.*, p. 17.

(13) 直訳すれば「王の旗持ち」である。戦場にあっては、王の標を持ち、場合により、王に代って兵を指揮し、平時にあっては、王の法廷で正義の剣をもつ係で、高位の貴族が任命される慣しであった。O'Callaghan, *op. cit.*, p. 38.

(14) González, *op. cit.*, p. 18 *et seq.*

(15) *ibid.*, p. 20.

(16) *ibid.*

(17) Cristina Segura Graiño, Semblanza Humana de Alfonso El Sabio, en 〔*Alfonso X El Sabio, Vida, obra y época*〕, p. 20.

(18) O'Callaghan, *op. cit.*, p. 8.

(19) *ibid.*, p. 9.

(20) Salvador de Moxó, Época de Alfonso X, en 〔*Historia de España Menéndez Pidal, Tomo XIII*〕,. p. 99.

(21) González, *op. cit.*, p. 21.

(22) Graiño, *op. cit.*, p.20 ; Alfonso X el Sabio en 〔*Enciclopedia Universal Ilustrada Europeo-Americana, Tomo IV*, 1909, Madrid : Espasa-Calpe, S. A.〕, p. 592 *et seq.*

(23) O'Callaghan, *op. cit.*, p. 203 *et seq.* ; Gonzalez, *op. cit.*, p. 65 *et seq.* ; Ballesteros, *op. cit.*, p. 189 *et seq.*

(24) 安部真穏『波乱万丈のポルトガル史』（一九九四年、泰流社）二七ページ。

(25) González, *op. cit.*, p. 22 *et seq.* ; O'Callaghan, *op. cit.*, p. 156 *et seq.*

三

一　一二五二年五月三〇日の夜、フェルナンド三世はセビーリャで逝去、翌日（六月一日）アルフォンソ一〇世は即位する。一二二五年にアンダルシアに出兵して以来、一二四八年にセビーリャを攻略するまで、アルフォンソ三世に率いられたカスティーリャ・レオン軍はグアダルキビル（Guadalquivir）川流域、バーハ・エストレマドゥーラ（Baja Extremadura）の主要都市を奪取し、一二四三年のアルカラス（Alcaraz）条約でムルシア（Murcia）を保護国とし、さらに、一二四六年以降、グラナダの王ムハマッド一世（Muhammad I）を臣従せしめていた。(1)

アラゴンとの関係も良好であり、ナバーラとは問題なく、唯一の問題はアルガルヴェの帰属をめぐるポルトガ

ルとの対立のみであった。[2]

その上、カスティーリャとレオンの絆が強まり、貴族は、戦争への積極的かつ熱狂的な参加により、それまでの王室との確執から安定した状態に移行していた。[3]

フェルナンド三世がアルフォンソ一〇世に残したものは大きかった。

二　アルフォンソ一〇世が即位した頃、カスティーリャ・レオンの経済は、基本的には農業と牧畜を基盤にしていた。しかし、国土回復戦の進展で、アンダルシア、さらに、ムルシアに領土が広がるにつれて、プラス・マイナスの両面がでてくる。イスラーム支配地域にあった流通の中心地が組入れられ、アンダルシアの大西洋岸とビスケー湾を結びつける海運業が発達する一方、カスティーリャは地中海に出口を持ち、南部への領土の拡大は羊牧の拡張となった。

他方、多数のイスラーム教徒の出国により熟練労働力が不足する。特に、一二六四年のムデハルの追放で、この事情が顕在化する。さらに、アンダルシアへのキリスト教徒の移住は北部地域の過疎化をもたらした。このような人口の移動、また、貨幣の改鋳によるインフレーションを阻止する有効な手段はなく、その上、アルフォンソ一〇世の野心的な政治上、学術上の事業が漠大な資金を必要とした。しかも、アルフォンソ一〇世自身が浪費家であった。一二七五年のモロッコ軍の進攻で、国の財政は一層苦しくなる。[4]

一二五二年の秋、即位して間もないアルフォンソ一〇世は、セビーリャに、身分制議会を召集する。財政問題の審議のためであった。物価騰貴を押えるため、一種の統制経済の措置がとられる。しかし、市場に商品が出まわらなくなり、状況は決して改善されなかった。[5]

この経済の悪化は是正されず、一二七二年、ブルゴスの身分制議会でも審議されるが、有効な手だてを見出すことができず、やがて、一二八一年から八二年の危機を迎える。アルフォンソ一〇世の権威の失墜の背景にはこのような事情もあったのである。

三　父フェルナンド三世がアルフォンソ一〇世に残した課題には、前述した財政問題の他に、いくつかあり、セビーリャの配分問題もその一つであった。

セビーリャの占領から程なく、フェルナンド三世は、王族、攻略戦に参加した貴族へ恩賞を分与する案を策定する。フェルナンド三世とアルフォンソ一〇世の案は、恩賞を受益者に封の概念で与え、これにより受益者は忠誠の提供を義務づけられる、というものであった。

このような恩賞の配分案を不満とする者が多かった。アルフォンソ一〇世の弟エンリーケ王子はこの恩賞の付与を謝絶し、宮廷から声を荒だてて退去する。この結果、セビーリャの配分の実施は中断されるが、これは王と貴族の間に猜疑を作りだす。結局、王は新たな配分案を策定する。(6)

アルフォンソ一〇世はセビーリャで即位後一二五四年一月まで引続きその地に滞在する。その数カ月間は王にとり満ち足りた日々であったようである。アルフォンソ一〇世は良い統治を心がけ、新たな協力者に取り囲まれる。そして、セビーリャは若き王の心を捕え、やがて、この町は王国の首都となる。(7)

五　アルフォンソ一〇世の宮廷は、先王の宮廷と比べて、その雰囲気は華麗であった。祖母にあたるベレングエラの人柄も影響したフェルナンド三世の宮廷とは感じが違っていた。そのような雰囲気に引かれてか、王と同年配の若い人達、詩歌に通じた人達が集る。また、アルフォンソ一〇世の学術、文学、さらに法学に対する好奇心

は学識のある人達、語学に通じている人達、法律学者を引き寄せる。[8]

一二五四年、セビーリャにさらに、トレドに学問所（Estudio General）がおかれ、王の学術、文学への好奇心を満足させようと熱心に研究作業する。

こうして、アルフォンソ一〇世の援助の下で、哲学、数学、天文学、占星術の文献のローマン・カスティーリャ語への翻訳が進められる。いわゆるアルフォンソの星座表（Tablas Alfonsíes）はこのような研究の成果であった。[9] 東方の文献も王の関心の対象であり、東方の咄しの翻訳の集成は、王位に就く前のアルフォンソの命で編纂が始められている。また、具体的な編纂は二〇年も後に始められた『スペイン全史』（Primera Crónica General de España）の資料の収集もこの頃から行われたと言われる。[10] さらに、アルフォンソ一〇世の名を高めた、法学関係の業績のうち、『フエロ・レアル』はその頃（一二五四年）に編纂されているし、『エスペークロ』『パルティーダス』の編纂も、この頃に着手されている（一二五五年、一二五六年）。[11]

六　アルフォンソ一〇世は、即位後、アルガルヴェなどに対する権利をポルトガルに要求する。その根拠は、アルガルヴェの東側に位置したニエブラ（Niebla）のイスラームの王がポルトガルの東進を恐れて、カスティーリャの保護国となったことで、アルガルヴェはその領土であったというのである。

結局、ローマ教皇の仲介もあり、アフォンソ三世の了承の下で、アルフォンソ一〇世は、終身、アルガルヴェを保有し、土地を付与し、フエロ（都市特権法）を発し、訴を聴問する権利を有することになる。[12] 無論、アルフォンソ一〇世のアルガルヴェの「支配権」は一代限りであり、事後、完全な主権はポルトガルに返還されることになったのである。そして、この協定を確実にするため、アフォンソ三世は、アルフォンソ一〇世の非嫡出の息

女ベアトリス姫との婚約に同意する。アフォンソには妃マティルダ（Matilda）がいるにもかかわらずである。これも和平の代償であった。

その後の成り行きを記せば、アフォンソ王の妃となったベアトリスの出産がアルガルヴェの地位を正常化する。ベアトリスの生んだ子供は、後にポルトガル王ディニス（Dinis）となるが、この子はアルフォンソ一〇世にとり初孫であり、[13] やがて、一二六七年三月、この孫への愛、今一つ、ムデハルの反乱（後述する）に際してのポルトガルの支援を嘉して、アルフォンソ一〇世はアルガルヴェに対するすべての権利を放棄する。[14]

（1）González, *op. cit.*, p. 29.
（2）Graiño, *op. cit.*, p. 22.
（3）González, *op. cit.*, p. 29.
（4）O'Callaghan, *op. cit.*, p. 114.
（5）González, *op. cit.*, p. 31. ; Hillgarth, *op. cit.*, p. 291.
（6）González, *op. cit.*, p. 34 *et seq.* ; Ballesteros, *op. cit.*, p. 114.
（7）González, *ibid.*, p. 37.
（8）*ibid.*
（9）O'Callaghan, *op. cit.*, p. 142.
（10）González, *op. cit.*, p. 38.
詳細は左記を参照されたい。
Diego Catalan, *La Estoria de España de Alfonso X. Creación y evolución*, 1992, Valencia（Fundación Ramón

Menéndez Pidal/Universidad Autónoma de Madrid).

(11) 中川稿、前掲論文、一〇ページ。文献も紹介してある。

(12) O'Callaghan, *op. cit.*, p. 157.

(13) *ibid.* p. 159.

(14) Moxó, *op. cit.*, p. 176.

四

一　アルフォンソ一〇世は、即位後、隣接する諸国との外交問題を始め、多くの難問に直面する。その一つはポルトガルとの関係で、アルガルヴェの帰属をめぐっての確執があったが、その解決について先述した（三の六）。

二　その頃、フランスの南西部のガスコーニュ（Gascony）地方をイングランド王が支配していた。アルフォンソ一〇世は、三代前の曽祖父にあたるアルフォンソ八世の妃がイングランドのヘンリー二世の息女で、一三世紀の初め、その婚資としてガスコーニュ公領を要求したことがあった故事を根拠に、アルフォンソ一〇世はガスコーニュに対する権利を主張し、さらに、イングランドの支配に不満をいだく土地貴族にも働きかけた。

このようなアルフォンソ一〇世の策略（？）を憂慮し、ヘンリー二世は、一二五四年三月、アルフォンソ一〇世と友好条約を締結し、アルフォンソ一〇世はその権利を放棄し、代りに、イングランドはナバーラ問題、また北アフリカへの出兵に際し、カスティーリャを支援することを約束する。そして、両国の友好の絆として、王儲エドワードの妃として、アルフォンソ一〇世の妹レオノール姫を迎えることにする。(1)

三　アルフォンソ一〇世の外交活動の焦点の今一つはナバーラであった。その頃のナバーラはフランスと国境を接する小国となっていた。一二五三年、国王テオバルド一世（Teobald I）が逝去。カスティーリャの干渉を恐れ、故王の妃はアラゴンと八月に条約を締結する。この条約はカスティーリャに対抗するものであり、アルフォンソ一〇世とハイメ一世の義父子関係は良いとは云えなかった。(2)

四　他方、両国とも国内に問題をかかえていた。アラゴンでは、バレンシア王国内のイスラーム教徒の反乱があり、カスティーリャでは貴族の一部の反乱があった。(3)

アルフォンソ一〇世は王権の強化をはかり、王国内の法の統一を目指した。ところが、このような改革は、当時まで主権者と臣下との間の微妙に保たれていた調和に関するその頃の考え方と相入れないものであった。(4) そして、これに拍車をかけたのが貴族相互のそねみである。むしろ個人的怨恨からロペス＝デ＝ハンス（López de Hans）は、一二五四年八月、カスティーリャを退去し、アラゴンに臣従する。

ハイメ一世は、これらアルフォンソ一〇世から退去した貴族たちを双手をあげて受入れる。加えて、結果的に行動をともにした形の王弟エンリーケとも同盟を結ぶ。

一二五五年一〇月、アンダルシアおよびビスカーヤで、同じ頃に、反乱が起きる。エンリーケ王子たちの追随者によるものであった。しかし、アルフォンソ一〇世の兵にこの蜂起は粉砕される。エンリーケ王子はチュニジアに逃れ、その地のスルタンの武将（庸兵）となる。その後、イタリア、フランスの各地を転戦し、一三世紀の末、アルフォンソ一〇世の没後に、カスティーリャに帰っている。(5)

この貴族の一部の反抗は、結果的に、カスティーリャと隣国アラゴンとの緊張を和げた。その原因はアルフォ

ンソ一〇世の「寛大さ」に求められることもあるが、ビオランテ妃の蔭の努力を見逃すことができない。

一二五六年一月、ビトリアで身分制議会が開かれ、数カ月前に誕生したばかりのフェルナンド王子が王儲と宣言される。この身分制議会にナバーラ王テオバルド二世が参加し、アルフォンソ一〇世に忠誠を誓約し、これにより、ナバーラはカスティーリャの一種の保護国になった、と言われる。(6)

同年の三月、ソリア（Soria）でアラゴンとの和平条約が締結され、アラゴンとカスティーリャの間の不信に終止符が打たれる。そして、両国の絆を一層強化する証として、カスティーリャのマヌエル王子（アルフォンソ一〇世の弟）とアラゴンのコンスタンサ（Constanza）姫との結婚が定められた。(7)

五　北アフリカへの進攻も、父王フェルナンド三世からの引き継ぎである。進攻の理由としていろいろあったであろうが、大ざっぱに言って、二つあった。一つは、レオン・カスティーリヤ王国を西ゴートを後継するものと考え、アフリカが、かつてローマの支配を受けていた時代、スペインの管区の一部であったし、西ゴートの時代もそうであったと考えて、アフリカの「領土」を回復することは、レオン・カスティーリヤにとり義務であり、当然である、というもので、いわば、イデオロギー上の理由である。今一つは、イスラーム教徒の侵入を防ぐため、少なくとも、ジブラルタル海峡を渡る出発点となる港湾を制圧する他はない、とする戦略上の理由である。(8)

アルフォンソ一〇世は、父王の考えを引き継いで、乗組員、造船所の整備、軍船の建造などの準備、さらに、ローマ教皇の支援も求める。そして、一二五四年三月から四月に開かれたトレドの身分制議会で、アルフォンソ一〇世は「アフリカ十字軍」の計画を公表し、賛同を得た。しかし、半島内の紛糾のため、その実施は棚上げされる。(9)

結局、アフリカへの「十字軍」の船団が、プエルト・デ・サンタ・マリア (Puerto de Santa María) を出発したのが一二六〇年の夏の終りであった。目的地はモロッコの港町サレー (Salé) である。九月一〇日、「十字軍」は無抵抗の町に進攻、町を破壊し、略奪、虐殺、婦女子の暴行のあげく、多数の住民を捕え、一〇月の初めに無事帰還した。[10]

六　一二六〇年の末から一二六一年の初めにかけて、セビーリヤで身分制議会が開かれる。主たる議題はアフリカ問題であったが、国王の要請もあり、セビーリヤ周辺のイスラム勢力の一掃も決議された。[11]

その頃、セビーリヤは、飛地のようなイスラームの支配地域に囲まれており、セビーリヤの安全が脅かされる形になっていた。

まず、ヘレスを攻略する。一ヵ月の包囲の後、ヘレスの君主は降伏する。アルフォンソ一〇世は、次に、ニエブラを目指す。先述したように、ニエブラは、すでに、カスティーリヤの保護国になっている。したがって、進攻の理由は貢納の遅延位しか考えられない。ニエブラも、一〇ヵ月の包囲で一二六二年二月末に陥落する。イスラームをスペインから排除するアルフォンソ一〇世の方針の前には、イスラーム国の存在は許されなかったのである。[12]

一旦、町が占領されると、イスラーム系の住民は追放され、代って、キリスト教徒が移住して来る。八月、入植者たちに、アルフォンソ一〇世はフエロ（都市特権状）を与え、一年後に、市民に「フエロ・レアル」を付与している。[13]

(1)　González, *op. cit.*, p. 50 *et seq.*; Ballesteros, *op. cit.*, p. 92 *et seq.*

(2) O'Callaghan, *op. cit.*, p. 153 *et seq.*
(3) González, *op. cit.*, p. 51.
(4) 中川、前掲論文、一〇ページ。
(5) González, *op. cit.*, p. 54 *et seq.*
(6) *ibid.*, p. 57.
(7) *ibid.*, p. 58.
(8) O'Callaghan, *op. cit.*, p. 167.
(9) *ibid.*
(10) *ibid.*, p. 172 *et seq.*; Ballesteros, *op. cit.*, p. 274 *et seq.*
(11) O'Callaghan, *ibid.*, p. 174.
(12) *ibid.*, p. 175.
(13) *ibid.*, p. 177.

五

一　年代が少々さかのぼるが、一二五六年三月、アルフォンソ一〇世がソリアに滞在中、ピサ共和国大使が訪れ、皇帝位が長い間空位になっている神聖ローマ帝国の皇帝への就任を要請する。この要請はピサ共和国の名において行なわれたが、その背後にイタリアの多くの都市の支持をほのめかした。(1)

アルフォンソ一〇世の家系について前述したように（二の一）母ベアトリスの出自がスワビア家で、その線

で、ドイツ皇帝の血統に連なる。その意味では候補になり得る一人であった。しかし、それまで、カスティーリヤの王族で候補の話題にすらのぼった者はいなかった。ところが、一二四五年の教皇によるフリードリッヒ二世の処分、その息コンラッドに対する反対がアルフォンソ一〇世の皇帝位への可能性を開いたのであった。[2]

ピサのこのような動きは、商権をめぐってのジェノアとの長年の確執の結果で、ピサの動きにマルセーユも同調する。[3] しかし、これら二者の支持では不十分で、ドイツの諸王により選出される必要があった。アルフォンソ一〇世は使節をフランスのルイ九世、さらに、ドイツにも送り、支持を求める。対立候補は、イングランド王ヘンリ三世の弟コンウオール伯リチャード (Richard of Cornwall) で、すでに、多額の選挙運動費を費消し、相当の支持を獲得していた。[4]

当然ながら、このことはカスティーリヤとイングランドの関係を冷やかなものにした。その結果、アルフォンソ一〇世はフランスへの接近をはかる。そして、一二五五年八月、フランス王の長子ルイ王子とカスティーリヤのベレングエラ姫（当時は、王位継承者）との婚約がととのう[5]（王子の早逝により婚儀に至らなかった）。

二　一二五七年一月一三日、皇帝の選挙がフランクフルトで行なわれた。アルフォンソ一〇世支持派はリチャード支持派を市から排除し、アルフォンソ一〇世を選出し、リチャード派は市外で選挙を実施し、リチャードを選出する（二重選挙）。[6] この時、この紛糾・混乱が一五年に及ぶことを誰が予想できたであろうか。

その後の成り行きを略述すれば、一二七二年四月、リチャード没。アルフォンソ一〇世は加冠を期待する。しかし、時の教皇聖グレゴリウス一〇世はアルフォンソ一〇世に加冠する気持ちはなかった。一二七三年一〇月一月、ハプスブルグ家のルドルフ (Rudolf) が皇帝に選出され、翌年、教皇により加冠された。[7] こうして、一二五

〇年のフリードリッヒ二世の逝去により始まった大空位時代に終止符が打たれたが、一五年に及んだアルフォンソ一〇世の奮闘、努力はまったく実を結ばなかった。

三　アルフォンソ一〇世の眼が対外問題に向いている間（一二六二年から一二七二年）、国内の諸問題に対する対策がおろそかになっていた。

アンダルシアとムルシアの征服、併合により、イスラーム系の住民の一部はグラナダやアフリカに移住したが、多くは残留する。[8]

グラナダは、イスラムの王国でありながら、カスティーリヤ・レオンとは有好的な関係にあった。前述したように、アルフォンソ一〇世の即位にあたり、先王フェルナンド三世との条約を更新し、カスティーリヤ・レオンに貢納の支払いを約し、アルフォンソ一〇世に臣従していた。アルフォンソ一〇世のアンダルシアにおける軍事作戦にも協力していた。しかし、その反面、グラナダは国力を蓄えつつあった。[9]

アルフォンソ一〇世がアフリカへの十字軍を構想した際、王はイスラーム系スペイン人の海上における支援を期待していたと言われ、また、タリファ（Tarifa）およびジブラルタル（Gibraltar）に対する要求も持ち出したりしたと言われる。これらは、グラナダにとり、受け入れ難い問題であった。[10]

一二六二年、アルフォンソ一〇世は、グラナダ王イブン＝アル＝アマール（Ibn al-Ahmar）とハエン（Jaén）で会談するが、この会談を境に、両国の関係は冷却化する。グラナダ側は、チュニジアの王、さらに、グアダルキビル河流域に居住するイスラーム教徒と連絡をとり、一勢蜂起を策する。

一二六四年五月（六月初めとする説もある）、イスラーム教徒は決起する。これはアルフォンソ一〇世にとり

不意打ちであった。特に、グラナダの参画に王は驚かされる。予想もしなかった反乱であったからである。イスラーム側はヘレス、レブリハ（Levrija）、ベヘル（Vejer）、アルコス（Arcos）、メディーナ・シドニア（Medina Sidonia）など、アンダルシアの要所を奪取し、一時、優位に立った。[11] 約三週間のうちに、キリスト教徒側は約三〇〇の町、城塞、拠点を失なったと言われる。[12]

このムデハル（Mudejar）（残留イスラーム教徒）の反乱の脅威の一つはその規模というか、広がりであった。反乱はアンダルシアのみならず、ムルシアにも及んだのである。[13]

一二六四年から六五年にかけて、アルフォンソ一〇世を襲った危機は大きかった。ムルシアの立地は重要で、その回復を急ぐ必要があり、アラゴンのハイメ一世は、キリスト教徒団結の立場からも、娘婿の危機を救うべく、軍事的に支援する。[14] 不意打ちを受けたカスティーリヤ・レオン軍は体勢を立て直す。全兵力を集め、反乱イスラーム軍の進出を喰い止める。一二六四年の夏、少なくともアンダルシア南部のイスラーム軍の動きを封じ込めたとも言われるが、その制圧にはもう少し時間を要したとみるべきであろう。[15]

一二六六年一〇月、アルフォンソ一〇世は、五ヵ月の包囲戦の後、ヘレスを征圧した。こうして、ムデハルの反乱が制圧されるが、その結果、一二六七年六月、アルフォンソ一〇世とグラナダ王は和平条約に合意し、新めて、グラナダ王はアルフォンソ一〇世に臣従し、毎年、二五万マラヴィーデスの貢納を支払うことを約する。

こうして、アンダルシア、さらに、ムルシアの秩序を回復するため、キリスト教徒の移住が促進される。当然、先住していたイスラーム教徒は退去（追放）させられる。[16]

四　一二六九年一一月三〇日、アルフォンソ一〇世の王儲フェルナンド（Fernando de la Cerda）とフランスの

ルイ九世の息女ブランシェ（Blanche）の婚儀が挙行された。[17] この婚儀の過大な費用に貴族が異議を申し立てるが、これは王と貴族の間の緊張の兆しであった。

もっとも、このような不満が一部にあったにもかかわらず、有力貴族は、結局、ムルシア再建のための課税を承認する。

一二七一年、アルフォンソ一〇世がムルシアに滞在しているとき、血縁で結ばれた[18]一部の貴族は、レルマ（Lerma）に集り、アルフォンソ一〇世の弟フェリッペ王子（相続財産をめぐって不満をもっていた[19]）を頭として、アルフォンソに対する陰謀をはかる。[20]

一二七二年八月末、ムルシアからの帰途、アルフォンソ一〇世は有力貴族が待ちうけていると知らされる。亡命から帰還したファドリック王子を同道したアルフォンソ一〇世は、武装して、あたかも敵に合いまみえる形の有力貴族とレルマで出会う。そして、九月初めの、ブルゴスで開かれた身分制議会で、貴族から不満の申し立てを受ける。それは、アルフォンソ一〇世が制定した「フエロ・レアル」また「エスペクロ」の適用に関するもので、伝統的な特権の存続を要求するものであった。[21]

一一月中旬、議会は閉会。反抗した貴族たちは王の宗主権を否認し、監守していた城塞を明け渡して、グラナダ王国に出国する。彼らはアルフォンソ一〇世に対する同盟をグラナダの王と締結したとも言われる。

王妃などの助言もあって、アルフォンソ一〇世は、貴族の特権（法）の存続、関税、新税の廃止を確約して、復帰を呼びかけた。しかし、貴族たちは王のこの譲歩を拒否し、その要求を拡大する。

そのような要求は、アルフォンソ一〇世にとって耐え難いことであった。国内の雑多な法を、王の制定する一

つの法に統一しようとする、その基本政策に反するからである。しかし、王妃、王子たちの懇請もあり、アルフォンソ一〇世は貴族たちの要求を受け入れることとし、王妃はその旨を知らせた。

グラナダに入国した反抗貴族とその追随者は一二〇〇名に及んだと言われる。[22]

五　一二七三年三月、アルフォンソ一〇世はアルマグロ（Almagro）に身分制議会を召集する。その地がフェルナンド王子の駐屯地に近く、また、グラナダ国境とも近く、関係者の出席に便利として開催地に選ばれたのである。王は、関税、新税について、一二六九年に貴族側が承認していたものも含めて、撤回、あるいは軽減を約束した。[23]

この議会に続けて、四月末から五月にかけて、アビラ（Avila）に身分制議会を開き、グラナダ情勢、貴族たちの反抗を説明し、さらに、ローマ教皇との会談のための旅行の審議した。[24]

一二七四年三月初め、ブルゴスに身分制議会を召集する。旅で不在中、王儲フェルナンド王子を摂政とすることが承認される。[25]

六　一二七四年六月、アルフォンソ一〇世は出立する。サモーラ（Zamora）、セビーリャ、そこで、東進し、バレンシア（Valencia）に入り、七五年一月、バルセロナ（Barcelona）着、ハイメ一世の歓迎を受け、フランス国境まで同道し、五月中旬、ボケール（Beaucaire）で教皇聖グレゴリウス一〇世と会談する。

出立に先立って、アルフォンソ一〇世は、ハプスブルグ家のルドルフが皇帝に選ばれていることをすでに知っていた。にもかかわらず、アルフォンソ一〇世は自己の権利を主張する。それに対し、教皇の関心はアルフオンソ一〇世の主張を撤回させることにあった。アルフォンソ一〇世は、いささか、意固地になっていたようである。

アルフォンソ一〇世の長い、寄り道につぐ寄り道といった感じの旅は示威のためであった。不要なまわり道の道程はスペインにおけるギベリン派（反教皇派）の強さを示すためであった、とも言われる。

平行線のような会談を続けているうちに、モロッコ軍（ベニメリン族）の進攻、そして王儲フェルナンドの急死の悲報が知らされる。ボケール滞在中、病を得たアルフォンソ一〇世は、小康状態になって、帰途に立つが、途中、八月、モンペリエで再び病が悪化し、重態になるが、回復して、帰路を急ぎ、その年の暮れに、カスティーリヤに帰着した。[26]

(1) González, *op. cit.*, p. 58 ; Ballesteros, *op. cit.*, p. 153.
(2) O'Callaghan, *op. cit.*, p. 198.
(3) *ibid.*, p. 199.
(4) *ibid.*, p. 200.
(5) González, *op. cit.*, p. 61.
(6) O'Callaghan, *op. cit.*, p. 200 ; Ballesteros, *op. cit.*, p. 175 *et seq.*
(7) O'Callaghan, *ibid.*, p. 212.
(8) González, *op. cit.*, p. 110.
(9) Moxó, *op. cit.*, p. 110.
(10) *ibid.*, p. 111.
(11) *ibid.*, p. 112.
(12) O'Callaghan, *op. cit.*, p. 183.

(13) Moxó, *op. cit.*, p. 114.
(14) *ibid.*, p. 115.
(15) O'Callaghan, *op. cit.*, p. 183 *et seq.*
(16) *ibid.*, p. 187 *et seq.*
(17) González, *op. cit.*, p. 84.
(18) *ibid.*, p. 96.
(19) *ibid.*
(20) O'Callaghan, *op. cit.*, p. 214 ; Ballesteros, *op. cit.*, p. 477 *et seq.*
(21) O'Callaghan, *ibid.*, p. 215.
(22) *ibid.*, p. 223 *et seq.*
(23) *ibid.*, p. 226.
(24) *ibid.*, p. 227.
(25) *ibid.*, p. 229.
(26) *ibid.*, p. 231 *et seq.* ; Ballesteros, *op. cit.*, p. 674 *et seq.*

六

一　モロッコのイスラーム勢力は、一二一二年のラス・ナーヴァス・デ・トローサの敗北以来、イベリア半島に進攻する力を無くしていた。しかし、アブー・ユーセフ（Abū Yūsef）の下で、モロッコの衰退していたアルモ

ハッド王朝を打倒したベニメリン（Benimerines）族は、イベリア半島の動きに眼を向ける。一二六三年と一二七五年、グラナダ王の要請を受けて、二度にわたり、騎兵の小部隊をスペインに派遣していた。さらに、アルフォンソ一〇世に対して不満をいだくカスティーリヤの貴族たちに支援する用意がある旨を吹き込んでいた。

アルフォンソ一〇世はベニメリン族の動きに注意を払っていたものの、一二七三年のグラナダとの、また貴族との和平の成立後は、モロッコ軍がもはや進攻することはないであろうと信じ込んでいた。アラゴンのハイメ一世も、同様に考えて、北アフリカにおける商権を考慮して、ベニメリン族によるセウタ（Ceuta）攻略を支援していた程である。(1)

二

ベニメリン軍の進攻はグラナダの王の要請に基づく。その先遣隊は、一二七五年五月、タイファに上陸、ベヘル（Vejer）、ヘレス（Jerez）まで進出する。

進攻の知らせを受けて、摂政フェルナンドは、直ちに前線に急行、七月二四日、ビリャレアル（Villareal）で急死する。二〇歳になっていなかった。

八月一六日、アブー・ユーセフがタリファに上陸、グラナダ王との協定を確認する。ベニメリン軍はコルドバ（Córdoba）、ウベダ（Ubeda）、バエサ（Baeza）の近くまで進出する。九月七日、エシハ（Ecija）で、前線最高司令官（adelantado mayor de la frontera）のヌーニョ＝ゴンサーレス＝デ＝ラーラ（Nuño Gonzalez de Lara）が敗死し、一〇月二〇日、トレドの大司教サンチョ二世（ハイメ一世の息）がハエンの近くで捕虜となり、殺害された。

こういう状況の下で、アルフォンソ一〇世の次子サンチョが戦線を立て直し、アルヘーシラス（Algeciras）港

の封鎖を命ずる。ベニメリン軍とモロッコとの連絡を絶つためである。

進攻、敗北の知らせを受けて、一二七五年の末に帰国したアルフォンソ一〇世は健康体ではなかった。国民はあたたかく王を迎える。二年間の休戦協定を結んだ後、一二七六年一月、アブー・ユーセフはモロッコに帰還する。

一二七五年一二月、アルカラー・デ・エナーレス（Alcalá de Henares）で、アルフォンソ一〇世はサンチョ王子、貴族、騎士、従軍した市民たちと会談し、引き続き、七六年一月、トレドで諸問題を検討した。[2]

三　王儲フェルナンドの突然の死は大きな問題で、それから三〇年間も、国に混乱をもたらす。簡単に言えば、問題は亡き王子の長子（王の孫）は、わずか五歳であったが、この子（孫）が王儲として認められるべきか、それとも、王位継承者に一七歳のサンチョ王子がなるべきか、であった。

法律上、明白な規定はなかった。「エスペークロ」には、王位は王の長男が、また、男の子がいなければ、長女が継承すると定められていた。また、一二五六年から六五年にかけて編纂された「パルティーダス」には代襲相続の考え方が導入されていた。つまり、長子相続の原則が強調され、長子が父の財産を全部相続し、この長子が王位継承前に死亡した場合、長子の子（孫）が相続権を持つ、というのである。

一二七六年、アルフォンソ一〇世はブルゴスに身分制議会を召集した。継承者問題を審議するためであった。参加者の大部分はサンチョ王子を継承者に推した。故アルフォンソ王子の遺児を推す者は少数であった。[3]

四　一二七七年六月、ベニメリン軍がタリファに再び上陸、八月三日、セビーリヤ近郊でカスティーリヤ・レオン軍を敗退させ、ヘレスを攻略、ロータ（Rota）、サンルーカル（Sanlucar）、ガリアナ（Galiana）、プエルト・

デ・サンタ・マリアを奪取する。一〇月末、グラナダ軍とともにコルドバを攻撃し、ポルクナ（Porcuna）、アルホナ（Arjona）、ハエンを略奪した。アルフォンソ一〇世はもっぱら守勢にまわり、決戦を回避したという。結局、一二七八年二月二四日、和平条約を締結する。[4]

このベニメリン軍の進攻の際中、一二七八年一月、王妃ビオランテは、亡フェルナンド王子の妃ブランシェと孫二人を連れて、カスティーリャを退去、アラゴンに旅立つ。アラゴンでは、ビオランテの弟ペドロ二世（在位一二七六～一二八五年）からあたたかく迎えられる。

夫アルフォンソ一〇世に相談がなかった、ビオランテ妃のこの行動をどのように評価すべきであろうか。孫可愛さからの祖母の行動か、それとも、末亡人となった嫁と孫の身の安全をはかるためであったのだろうか。アルフォンソ一〇世の病気か進行しており、その死後の予想される混乱を考えると、後者の事情を考慮に入れるべきであろう。[5]

結局、一年半の後、一二七九年七月、ビオランテ妃は単身カスティーリャに帰国する。[6]

五　一二七八年五月、アルフォンソ一〇世はセゴビア（Segovia）に身分制議会を召集する。サンチョ王子により重い責任をもたせるためで、王子は、肩書がつかないけれども、事実上、共同統治者となったのである。[7]

アルフォンソ一〇世は、モロッコ軍の来攻を妨げるため、アルヘーシラスの攻略を企画する。当初、グラナダは協力し、アルヘーシラス港を封鎖するが、グラナダはカスティーリヤとの同盟を打ち切り、アルフオンソ一〇世の企画は失敗する。[8]

このグラナダに対する攻撃をアルフォンソ一〇世は決心し、一二八〇年、サンチョ王子に出兵を命ずる。その

頃、王の病は進行し、失明に近い。この進行作戦も失敗する。[9]

六　ところで、カスティーリャとフランスの関係は、一二七六年以降、冷却している。[10]その理由の一つは、言うまでもなく、故フェルナンド王子の遺児の処遇であり、今一つは、ナバーラ問題であった。そのため、一二八〇年のクリスマスの前、教皇の斡旋もあって、アルフォンソ一〇世はフランス王フィリップ三世とバイヨンヌ（Bayonne）で会談する。懸案の諸問題を解決するためであった。しかし、フランス王が甥（フェルナンド王子の遺児）に、カスティーリャの属領となっているハエンを与えて欲しいという申し入れをきっかけに会談は決裂する。[11]

一二八一年三月、アラゴンのペドロ三世、アルフォンソ一〇世とサンチョ王子は会談し、対イスラームの協力、ナバーラ問題に対する共同歩調について合意する。[12]

同年、アルフォンソ一〇世は、再度、グラナダに進攻する。六月、グラナダ軍が敗走、グラナダ側の講和の申し入れをアルフォンソ一〇世は拒否する。[13]

七　一二八一年、セビーリャで身分制議会が開かれる。その主たる議題は対グラナダ戦争の戦費調達であった。アルフォンソ一〇世は、財源を増税よりも、通貨の鋳造に求めた。その席上、アルフォンソ一〇世は対佛交渉にからめて、ハエンを分離し、フェルナンド王子の遺児（孫）に与える案を口に出す。サンチョ王子がこれを不満としたことは言うまでもない。これが、いわゆるサンチョ王子の「反逆」のきっかけとなる。[14]

議会閉会後、サンチョ王子はコルドバに赴く。王の命令でグラナダとの講和を結ぶためであった。しかし、その機会を利用して、サンチョ王子は各地で有力者と会い、自分の立場を説明し、アルフォンソ一〇世と対立する

場での支持を求めたのである。サンチョ王子の言い分は、アルフォンソ一〇世は病気で、もはや統治能力を失なっている、と言うものであった。[15]

一二八二年四月、サンチョ王子はバリャドリッドに「身分制議会」を召集する。召集者が王ではなかったので、身分制議会としての法的要件が欠けていた。しかし、この会議には、王妃ビオランテ、マヌエル、ペドロ、ファン、ハイメの各王子など王室のメンバー、司教たち、有力な貴族たちが出席する。もっとも、強制されての出席者、意味がわからないままの出席者もかなりいたと言われる。主要な聖職者のうち不参加だったのは、アルフォンソ一〇世にあくまでも忠実であったトレドとセビーリャの大司教位であった、と言われる。この会議の主たる議題は王の処遇であった。貴族たちはサンチョに王就任を要請する。しかし、王子は辞退し、結局、サンチョ王子は司法権、徴税権、軍事権を掌握し、アルフォンソ一〇世は、権限のない、肩書きのみの王とすることになる。[16]

この会議に並行して、他方、各地で司教、修道院長、市民たちが都市同盟（Hermandades）を結成する。これらは、いずれも、暗黙的にサンチョ王子を支持するものであった。[17]

八　アルフォンソ一〇世はセビーリャに取り残されていたが、ムルシアが、セビーリャとともに王支持の都市同盟を結成したことは一つの慰めであった。

王妃、王子たち、国民から見放され、アルフォンソ一〇世は近隣の国王の支援を求める。[18] しかし、積極的支援の返答は得られない。むしろ、アルフォンソ一〇世の孫にあたる、ポルトガルのディオニス王のサンチョ王子支持はアルフォンソ一〇世にとり大きな打撃であった。[19] むしろ、かつての敵、たとえば、ベニメリンのアブー・ユ

ーセフが来訪し、見舞い、金子を用立てたと言われる。[20]

九　一二八三年一一月、アルフォンソ一〇世はその遺言を公表する。[21] 王は、口をきわめて、サンチョ王子を裏切り者として非難する。そして、故フェルナンド王子の遺児アルフオンソを王位継承者と明示し、この王子に子孫がいない場合、伯父にあたるフランスのフィリップ二世が王位を継承することを定める。

一〇　他方、サンチョの側にも問題があった。関係者の間の不満である。サンチョ王子に服従しないため、伯母のベレングエラ王女（ラス・ウェルガス・デ・ブルゴスの修道院長）が追放される。ファン、ハイメの両王子は、恩賞が少ないとして、アルフォンソ一〇世の陣営に復帰する。教皇マルティン四世まで、サンチョ王子の態度を非難する。[22]

父王の側近にあって、看護にあたっているベレングエラ（ポルトガル王サンチョの妃、ディオニス王の母）はサンチョ王子の妃マリーア・デ・モリナと和解のために、蔭で努力していたと伝えられるが、[23] にもかかわらず、一二八四年一月二〇日付の遺書では、[24] まだ、サンチョ王子に対する好意はみられない。しかし、故フェルナンド王子の遺児についての記載がなく、王位がフランスに移る可能性は一応なくなる。そして、特に忠実である子供ベレングエラ、ウラーカ・アルフォンソ、マルティン・アルフォンソへの遺贈が記載される。

アルフォンソ一〇世にサンチョ王子を許す気持ちがあったであろうか。老いた王がサンチョ王子を想ってむせび泣いた、との記録が残されているという。しかし、親子が対面することなく、一二八四年四月四日、アルフォンソ一〇世はセビーリャで逝去。六二歳であった。王は、その遺書の指示に従い、セビーリャの大聖堂（カテドラル）に、父フェルナンド三世、母ベアトリス妃の墓所の隣に葬られた。[25]

(1) O'Callaghan, *op. cit.,* p. 234.

(2) *ibid.,* p. 234 et seq ; Ballesteros, *op. cit.,* p. 735 *et seq.*

(3) O'Callaghan, *ibid.,* p. 236 et seq. Ballesteros, *ibid.,* p. 781 *et seq.*

(4) O'Callaghan, *ibid.,* p. 244.

(5) *ibid.,* p. 244 *et seq.*

(6) *ibid.,* p. 248.

(7) *ibid.,* p. 246.

(8) *ibid.,* p. 247.

(9) *ibid.,* p. 249.

(10) González, *op. cit.,* p. 131.

(11) O'Callaghan, *op. cit.,* p. 251.

(12) *ibid.,* p. 253.

(13) *ibid.,* p. 255.

(14) *ibid.,* p. 257.

(15) *ibid.,* p. 258.

(16) *ibid.,* p. 260 *et seq.*

(17) *ibid.,* p. 262 ; Ballesteros, *op. cit.,* p. 866 *et seq.*

(18) O'Callaghan, *ibid.,* p. 264.

(19) Moxó, *op. cit.,* p. 202.

(20) O'Callaghan, *op. cit.*, p. 264.

(21) この文章は左に収録されている。
Alfonso El Sabio, *Antologia*, p. 203 *et seq.*

(22) O'Callaghan, *op. cit.*, p. 266.

(23) *ibid.*, p. 267.

(24) この文章は左に収録されている。
Alfonso El Sabio, *Antologia*, p. 210 *et seq.*

(25) O'Callaghan, *op. cit.*, p. 267.

七

以上、アルフォンソ一〇世の生涯を素描した。王の誕生した一二二一年は、わが国では承久の乱の年であり、没した一二八四年は弘安の役の二年後であり、王の生きた時代は北条時宗が活躍した時代と並行する。

歴代の王と同じく、アルフォンソ一〇世もイスラーム勢力と戦ったが、その「国境線」は先王フェルナンド三世の線をあまり出ておらず、むしろ、アルフォンソ一〇世は貴族との対立・抗争に終始したと言ってもよいであろう。その原因はいろいろ取り沙汰できようが、その一つはアルフォンソ一〇世自身の失政である。神聖ローマ帝国の皇帝位への執着、国費の乱費、王位継承をめぐる不手際等々であり、この面から見れば、賢王と呼ぶことに躊躇を感ずる。カスティリヤの王権の弱さの根はここにもあったとみることもできよう。

しかし、その反面、戦いに東西奔走しながら、主宰した学術研究の事業は大きな実を結んでおり、その編纂した法典等は後世に強い影響を及ぼしており、アルフオンソ一〇世は学問を理解し、後援した「賢王」であった。

本稿では、主としてアルフオンソ一〇世の生涯をたどり、王の学術研究事業について深くふれなかった。また捨象した問題も少なくない。法律学上の事績については別稿で筆者は取上げているが、[1] その他の文学、詩歌（たとえば、サンタ・マリア讃歌 Cantigas de Santa María）、歴史学、天文学等の成果[2]について論ずることは専門知識のない筆者にとり重荷である。筆者の理解できる範囲内で今後もアルフォンソ一〇世に関する勉強を続けたい。

（1） 中川稿、前掲論文、参照。

（2） 本稿一の注の文献参照。